

日本列島病院探訪



全国の特徴ある病院取材する『フォルテ』



Interviewee
副病院長
消化器・移植外科学 教授
大段 秀樹
Hideki Ohdan



Interviewee
病院長
整形外科学 教授
安達 伸生
Nobuo Adachi

“FORTE”



Interviewee
周産母子センター 講師
病院診療 准教授
(小児外科)
佐伯 勇
Isamu Saeki



広島大学病院

Hiroshima University Hospital

Interview ドクターズマガジン編集部
Text 田口素行 Photograph_和田夏央

052

病院探訪
広島編



水と緑に抱かれ、
折りが息つくまち、広島

広島の地から、革新的な取り組みで 日本医療の未来を切り開く

病

床数742床、49診療科を有する広島大学病院は、広島県唯一の大学病院であり、国内有数の歴史ある医科・歯科連携病院だ。「全人的医療の実践」「優れた医療人の育成」「新しい医療の探求」を理念とし、次世代人材の育成や革新的な研究、多様な未来型高度先進医療を推進する。

2024年には文部科学省の【高度医療人材養成拠点形成事業】に中四国地方で唯一採択され、2025年には厚生労働大臣より【臨床研究中核病院】に承認。さらに外科医不足解消の一手として若手外科医にインセンティブを付与する国立大学初の試みである【未来の外科医療支援手当】を導入。また、42国立大学病院の7割が赤字経営にある中、2023年度の業務損益で全国トップを誇り、黒字経営を維持していることも特筆すべき点だ。

整形外科科学教授であり病院長を務める安達伸生氏、消化器・移植外科学教授の大段秀樹氏、周産母子センター講師の佐伯勇氏に話を伺い、日本の医療の未来を見据え、常に進化・挑戦し続ける広島大学病院の取り組みに迫った――。



“FORTE,”

広島大学病院

Hiroshima University Hospital

日本全国、そして世界の
医療・教育・研究の発展に貢献

広島県唯一の大学病院であり、中四国地方の医療の中核を担う広島大学病院では、全診療科で革新的な医療・研究に取り組んでいるが、中でも「整形外科」「外科」「小児科」の注目度が高い。

整形外科では、前教授の越智光夫氏（現・広島大学学長）が開発した、膝軟骨の再生医療「自家培養軟骨（JACC®）」が日本発の細胞加工製品として、国内で初めて保険収載（2013年）されるなど、世界トップレベルの診療・研究を行う。整形外科学の教授でもある安達伸生病院長も再生医療の研究開発を推し進め、現在、JACC®は変形性膝関節症に対しても保険適用の承認が見込まれている。さらに機能性タンパク質「シルクエラスチン」を用いた新たな半月板の再生医療にも取り組む。

広島県は野球、サッカー、バスケットボールなどプロスポーツも盛んであり、県内唯一の大学病院として各プロチームとの連携が広島大学病院整形外科に集中していることも特徴だ。

「プロ選手のメディカルチェック、外傷治療、リハビリなど多角

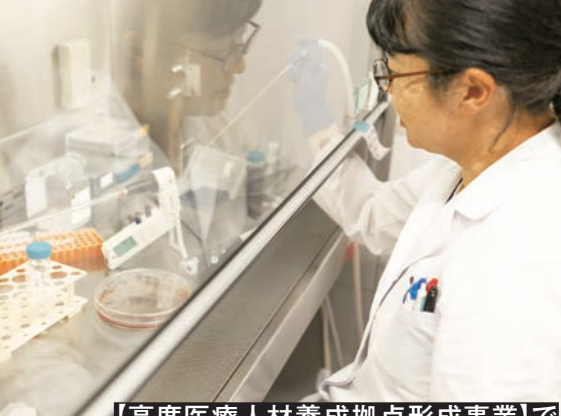
的に関与し、さらに広島県に1箇所しかない【スポーツ医学センター】では、アスリートのメンタル・フィジカル評価とパフォーマンス改善を科学的に支援しています」

外科においては、大講座制による領域横断的なチーム力に強みがあり、高難度手術も積極的に実施。2025年度に導入した若手外科医にインセンティブを付与する【未来の外科医療支援手当】は、外科医不足解消に一石を投じる改革であり、安達氏は「この第一歩が全国的な外科医不足解消を実現するバタフライ効果になれば」と期待する。

小児科は、中四国地方で唯一の【小児がん拠点病院】として、高度な小児がん治療を行う。最近では小児がん治療にVRゲームを導入した世界初のプロジェクトも注目されている。

42国立大学病院の7割が赤字の状況にある中、広島大学病院は黒字を維持していることも注目すべき点だ。近年、大規模に設備投資をしていないことも一因だが、黒字経営の理由は複数ある。

「データを駆使して、経営を見える化し、効率化を実現しました。元医療機器メーカー社員を採用し、医療機器や医薬品の価格交



【高度医療人材養成拠点形成事業】で 臨床教育・研究に強い医師を養成

広島大学の「SPARK! Plan for MED」が、文部科学省の【高度医療人材養成拠点形成事業】のタイプA(補助額年間8000万円)に採択。「SPARK! Plan」とは、研究者育成に関する広島大学の多様なサポートや取り組みを包括した名称。臨床研修期間からの大学院進学支援、研究優秀者に「病院選抜助教」のポストを準備するなど、卒前卒後のシームレスなキャリアパスを支援している。

伸



— 当院を漢字一文字で表すと —

国際競争力に優れた臨床研究と高度医療を伸ばします。地域との連携を伸ばし、安全安心な社会づくりに貢献します。職員一人一人の能力を伸ばし、信頼の医療を提供します。

病院長 **安達 伸生**



中四国地方で唯一 最新型 da Vinci 5 導入

2025年7月、最新型手術支援ロボット「da Vinci 5」を導入。2010年に初代ダヴィンチを導入以降、2025年6月までにを行った手術は3100件超と全国有数。

渉を徹底して行い、高コスト構造を改善。病床は診療科別ではなく多科の共有病床とし、柔軟なベッドコントロールにより病床稼働率85%超を維持。さらに手術枠を拡大し、特にマンパワーがある日中に手術を増やして、手術数の増加と安全性の両立を図りました。手術件数はコロナ禍前を大きく上回り、現在は年9000件を超えています」

さらに2025年には院内救急救命士5人を新規採用し、タスクシェアによる効率化も推進。こうした取り組みは収益化だけではなく医療の質の向上にもつながっている。

大学病院では教育と研究も重要な使命だ。広島大学は2024年に文部科学省の【高度医療人材養成拠点形成事業】に中四国地方で初めて採択された。

「新病院院では教育と研究も重要な使命だ。広島大学は2024年に文部科学省の【高度医療人材養成拠点形成事業】に中四国地方で初めて採択された。」

医学生・研修医教育を1つのセンタリーに集約し、シームレスな教育提供とキャリア支援体制を構築。研究に優れた医師の養成に取り組んでいる。国際水準の臨床研究や医師主導治験における重要な役割を担っていることが評価され、2025年には厚生労働大臣より【臨床研究の中核病院】に承認された。

2030年度にはJR広島駅北口に、県立病院機構が運営を担う新病院(開院時860床程度)が開設予定だ。広島大学病院は、医療人育成や人材派遣において新病院へ果たす役割が大きい。「新病院」という魅力に加え、教育・人材育成の充実をさらに図り、全国から広島県に医師が集まる呼び水にしたい。新病院と共に医療の発展に貢献していきたいと思っています」

高難度手術を積極的に実施 未来の外科医育成にも注力

大学病院の外科の多くは管腔臓器と実質臓器に講座が分かれているが、同院は異なる。大段秀樹氏が教授を務める消化器・移植外科には、上部消化管、下部消化管、肝・胆・膵の移植の外科医が所属。大講座による同一チームの運用によって、高度医療の推進と質の向上を両立している。

「移植外科の高度な血管吻合技術は、肝臓がん手術など体外でがん切除を行い、それを元に戻す体外切除再移植にも求められます。移植外科と肝・胆・膵外科が同一チームであるからこそ、体外切除再移植という高度ながん手術も安全かつ積極的にできる。また、手術中に肝臓がんの腸へ

の浸潤が分かった場合も、上部消化管チームへタイムラグなくつなげられることも強みです」

また、2025年度には「未来の外科医療支援手当」を導入したことも注目だ。この手当により、消化器外科、移植外科、呼吸器外科、心臓血管外科、乳癌外科、小児外科の若手外科医の給与が年120万円増額した。診療科によって待遇に差をつけるのは、大学病院では全国初の試みである。

「消化器外科医にはジェネラルな臨床力が求められ、多岐にわたる業務を行う必要があることから、若手医師の目には、汎用業務を行ってほしいように映ることもある。しかし、集学的治療が重要ながん治療において、各科の調整役を担うなど消化器外科医はがん治療の中核を担っており、その価値は正當に評価

Top10%論文数6年連続1位

他の研究論文からの引用回数が多い論文数を表す「Top10%論文数」において、中四国地方の医学部のある10大学の中で広島大学は2024年まで6年連続1位。また、他誌への引用数など、インパクトファクターの高い学術雑誌「Q1論文数」に収録された臨床医学領域の論文数が2021年度に全国10位(中四国地方1位)と質の高い論文を数多く発表している。



Hospital Data ※2024年度

▼ 救急車搬送患者数	▼ 外来患者数	▼ 入院患者数	▼ 指定救急	▼ 病床数	▼ 診療科数	▼ 医師数
3317 件/年	延べ 51万9601 人/年	延べ 22万9231 人/年	3 次救急	742 床	49 科	1130 人

※2025年4月 現在



持続可能な外科診療体制に向け ワークライフバランスにも注力

同院ではワークライフバランスの実現に向けて、さまざまな取り組みを行う。
「チーム制を取る上で大事にしているのが、患者さんの変化の予兆に気が付く“主治医の勘”が途切れることのないよう、些細な変化も引き継ぐことです。“チーム全員が患者さんの担当”であることを常に意識することも大切です」(大段氏)
また、個々に異なるライフイベントをチーム全体で相互補完している。
「忙しいタイミングは一人一人違う。チームは家族であり、助け合いの精神が最も大切です。若手医師は患者さんの不幸な転帰に無力感を抱くこともある。過去の私も同じで、先輩から『その気持ちは自然。残りの仕事は代わりにやるから、帰って気分転換しなさい』と言われたことで救われた。『たまたま助けてくれた先輩がいた』ではなく、組織として定着させるようにしています」(大段氏)

されるべき。外科医への支援手
当の案を教授会に提出したところ、『外科の疲弊は医療全体に波及する』という社会的課題の1つの解決策として、全科一致の理解を得られました」

こうした外科医への支援は、同大学にとどまらず、全国へと広がっていくことが肝要だと大段氏は考える。実際、この取り組みに倣い、長時間労働の外科医に対してインセンティブを付与する制度を導入した大学病院も現れ始め、同大学が先駆けた試みが全国に波及しつつある。

さらに、大段氏は外科医の働き方改革にも注力する。

「当科はチーム制を取っています。シフト制のため1人の患者さんを診察する医師は毎日変わりますが、医師らが1つの生命体のごとく機能し、責任を共有する。責任は分散ではなく、共有することが大事。時間内は、患者さんと1対1で全力で関わり、時間がきたら切り替える。そうすれば、長時間の手術でも集中力が維持できます」

小児がん治療・研究をリード 世界初VRプロジェクトを進行

同院は、全国15施設の小児がん拠点病院の1つとして小児がん治療をリードする顔も持つ。特に、小児三大固形悪性腫瘍の1つ「肝芽腫」については、世界最先端の治療・研究を誇る。小児外科では2000年以前から全国の肝芽腫患者の全数を把握し、現在はアメリカ、ヨーロッパの全ての患者の登録も担っている。

最近では小児外科医の佐伯氏が考案した、がん治療にVRゲームを用いた世界初のプロジェクト「VRはたらく細胞」が注目されている。人気漫画「はたらく細胞」(講談社)のキャラクターが登場するVRゲームを制作しているのだ。このゲームによって、治療への理解を深め、抗がん剤治療のつらさ・ストレスの軽減を目指している。きっかけは佐伯氏がコロナ禍の教育停滞を機に開発した、VR診察練習ソフト(特許出願中)。VRの没入感は練習効率に優れており、医学部4、5年次で学ぶ診察技法をわずか30分

のゲームで獲得できるといふ。

「共存と延命を視野に入れた成人のがん治療とは異なり、小児がんはがん細胞を徹底的に根絶する方針を取るため、子どもは最大強度の抗がん剤治療に耐えなければならぬ。子どもはメンタルケアは非常に重要であり、病状を理解するためにVR技術を活用できないかと考えました」

佐伯氏は発案者として、支援金の獲得から、講談社・制作企業との交渉、さらにゲームシナリオの執筆まで自ら行った。佐伯氏自身が生粋のゲーム好きだからこそ、こだわり抜いて制作したVRゲームは2025年末に完成見込みで、リリース後は全国の病院へ無料展開する予定だ。

「将来は他疾患や新たなキャラクターに拡大展開し、日本発のデジタルメディスンを世界に広めていきたいです」

治療理解とアドヒアランス向上へ 日本発のデジタルメディスン開発

「小児は初期から最大強度でがん治療を行う。だからこそ、つらい治療に耐えるための根拠を知る必要があります。“手術以外でも子どもたちの力になりたい”と思い、VRゲームの開発を始めました」(佐伯氏)



周産母子センター 講師
病院診療 准教授
(小児外科)
佐伯 勇

今回、探訪した病院

広島大学病院

〒734-8551
広島市南区霞 1-2-3

